

紙風船屋さん

皆川美恵子

銀の吹口からフッと息を吹き込むと、ポックリ丸くなる紙風船。いったい紙で丸い球体を作るといふことを、誰がいつ頃に考へつたのでしょうか？ 紙風船は日本にだけあって、他の国にはないようですから、日本で創り出されたおもちゃだと思われま

す。
私達の祖先は、着物、足袋、雨合羽、傘、それに水筒、椀といった身の回りの生活の品々を、これまでに紙で創り出して来ました。紙風船もこの紙の文化の中から生み出された、子どものおもちゃなのでしょう。

紙風船は糊と紙だけで作られる至極単純な玩具です。しかし、紙風船を手にとり、よく眺めてみると、色と形、つき上げると

萎まずに自と空気が入り膨らむしくみ、そしてそれらを支える紙の材質や製作技術など——つまり一言でいえば、デザインが何と優れているか気づかされます。

今回の児童文化探訪は、東京に一軒だけ残る紙風船屋さんをお訪ねして、どのように作るのか昔から不思議に思っていた、紙風船の作り方をはじめ、いろいろのお話を聞かせていただきました。

この道五十年以上の永江さん

紙風船屋さんは、戦前は東京に二十軒からありました。しかし

今では、田端にお住まいの永江さんのところ一軒だけになっています。永江重之さんは明治四十三年三月十五日生まれで今年六十九歳。昔ながらの「手貼り」による方法で紙風船を作り続けています。

永江さんが紙風船とかかわりをもったのは大正十一年の十二歳の時で、お姉さんが入谷いりやにあった紙風船屋の水野さんということに嫁いだ時に、手の数はたくさんほしいということで、お母さんと弟の重之さんもしょに手伝いに行ったことから始まりました。ですから、かれこれ五十余年、紙風船と共に暮してきたことになりました。

永江さんは、水野さんのところで、高等小学校に通いながら、店の小僧として仕事を手伝いました。その頃は、紙風船が作るそばから売れるという盛んな時代で、問屋さんや内職の家々を行ったり来たり忙しい毎日だったそうです。

紙風船は、紙風船屋の職人さんによっても作られました。紙を染め、裁断し、ただ貼るだけにして、内職仕事として外に多く出されてきました。紙風船を貼るのは手先を使う難しい仕事ですが、手をとって教え、常時、百軒以上の内職家庭を抱えていたといわれています。今では紙風船の内職をやる人が少なくなり、昔から続いている年をとった人数人と、永江さん夫婦とが細々と作っ

るにすぎません。

永江さんが紙風船の作り方を教わった、義理のお兄さんにあたる水野貞三郎さんは、山田さんというところで紙風船を習いました。その山田さんの家は、紙風船屋としては由緒のある本家本元らしく、水野さんはそこで修業したことをいつも自慢にして話し、自らを「山田屋水貞」と名乗っていたといいます。

さて、その山田さんにしても誰かに紙風船を習ったわけです。水野さんは永江さんより二十歳以上も年上ということですから、もし今生きているとしたら九十歳でしょう。その九十歳の人が教わった山田さんなり、その山田さんの親方のことを考えると、明治を越え江戸時代末期へと遡ってゆくことができます。

それなら紙風船は、江戸時代のいつ頃から、誰によって作られるようになったのでしょうか？ 残念ながら当時の風俗誌には、紙風船のことは何も記されておらず、詳しいことは何一つわかりません。

紙風船の作り方

紙風船には小さなものは五寸（約一五cm）から大きなものは二尺（約六〇cm）までと大きさが実に二十種類以上があります。そ

して大きくなるに従って、八枚貼り、十枚貼り、十二枚貼りと貼り合わせる紙が多くなっています。

ここでは二五〇、八枚貼りの紙風船を例にとって、詳しく作り方を紹介してみることしましょう。

《ぬき型で生地をとる》

舟型をした一枚一枚の紙を「生地」と呼びますが、この生地や、口や底になる円形の紙は、ぬき型を使って切りぬいてゆきます。

そのためには前もって紙を揃えておかなければならず、これが神経のいる大事な予備作業です。

紙は薬包紙や本のカバーに用いる、あの薄い半透明なグラシンペーパーです。永江さんのところの紙風船は、現在六色（赤・黄・黄緑・白・レンガ・緑）で構成されていますから、その配色を考え、次のような二組のものを揃えてゆきます。

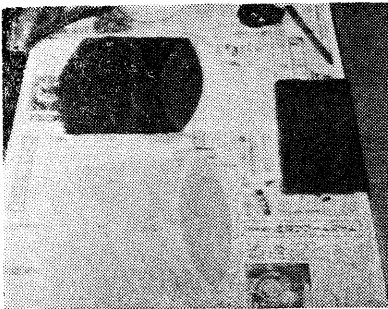
まず一組は、黄緑、レンガ、緑、赤の四色のグラシンペーパーをこの順序で繰り返しながら二百枚重ね、それを綴じて、二綴四百枚を揃えます。もう一組は、紙風船に二度ずつ使われて地色となる黄と白を重ねてゆき、二百枚を綴じて、やはり二綴四百枚をきれいに揃えます。こうして揃えたものには、上から重をして二日間位おき、中の空気を抜きます。

このように準備が整ったら、先が刃物になっているぬき型を置き、その上にあて木を載せ、その上から木槌でポンポン叩いて、生地を切り抜いてゆきます。余った部分では、円形の口や底を、やはりぬき型を使ってとってゆきます。四色重ね四百枚と二色重ね四百枚の合計八百枚の生地からは、百個の紙風船が出来上ることになります。

《八枚の生地を貼り合わせる》

さて次に、目を見張るような紙風船屋さんの美事な業がはじまります。四色重ねの

生地の組と二色重ねの生地の組を、それぞれのしてゆき、糊しろ分を作るのです。のされてできた糊しろの部分を目と呼びますが、この目がどれも等しく虹のように出てきます。内職を始める人にとって

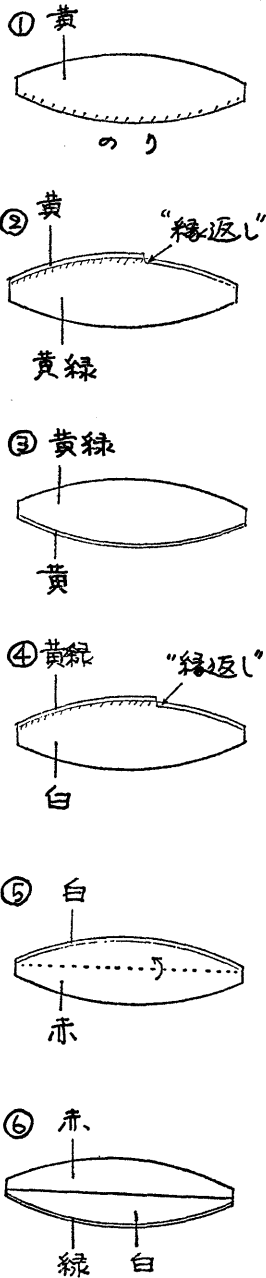


四色重ね（黄緑・レンガ・緑・赤）の組と二色重ね（黄・白）の組の交互から一枚ずつとって、中央の敷布の上で貼り合わせてゆく

は、この均等に目を出す作業が一番難しく、これが上手にできないと、貼り合わせるのもうまくゆきません。

次に、目に糊をしいていきますが、この時、糊を二度塗りします。一度塗っただけでは糊は紙になじまず、紙がのびたりして、貼ってゆくと皺も寄ってしまうのです。一度塗ったら少し時間を置いてゆくとこませ、もう一度塗ると糊の効きもよく、仕事もきれいにゆくということです。このことは全ての糊仕事のコツだそうです。

貼り合わせていくには、まず二色重ねの方から黄の生地一枚を取り、糊のついた方を手前にして置きます。(①) 次に四色重ねの方から黄緑を取り、糊のついた方を向うにして、黄の上に置いてゆきます。この時、黄緑を少し下にずらして置き、黄の縁を手

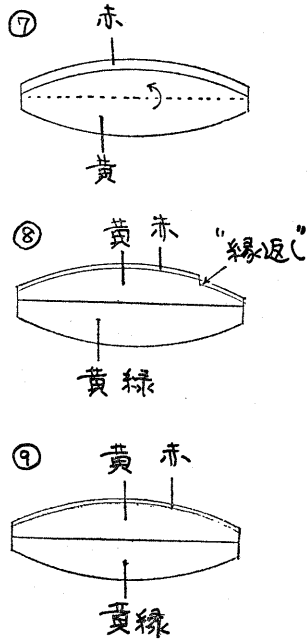


前に折りまげて、黄緑の糊の部分につけていきます。(②) これを「縁返し」といいますが、黄緑の上縁をきちんと押えないと動いてズレてしまうので、指先の熟練を要します。

黄と黄緑が貼り合わさったら、貼り合わさった方を手前側に置き直して(③)、この上に二色重ねから白を取り、やはり糊のついた方を向うにして、糊しろ分を控えて黄緑の上に置きます。そして黄緑の縁を縁返ししてゆきます。(④)

黄緑と白がいたら、また向うを手前に置き直して、これまでと同じ要領で、レンガ色、黄、緑、白、赤と八枚を次々に貼り合わせてゆきます。

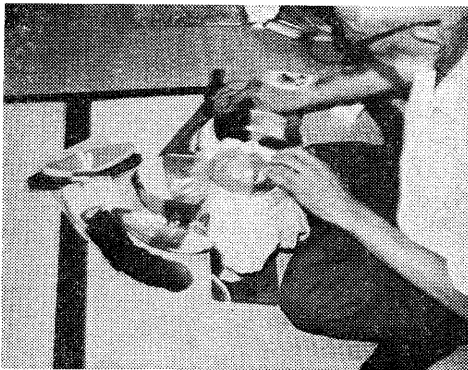
そして最後の赤の生地と、最初の黄の生地を貼り合わせるのに、赤の生地を半分のところまで折り上げ(⑤)⑥、表と裏をひっ



くり返し(⑦)、黄の生地も半分のところから折り上げ、赤の上
にずれるように置き、赤の縁を黄の糊のついた部分へと縁返しし
ます(⑧~⑨)。

こうして貼り合わさった⑨は、しばらくの間、糊が乾くまで置
いておきます。

今までの説明で、おわかりになったでしょうか？ 傍でジッと
目を凝らして視ていても、舟型をした生地が、鮮かな手さばきで
上下左右に動き、それでいて次から次へと紙風船が出来上ってい
くのですから、何とも不思議で、狐につままれた気がしました。
永江さんに「見ているだけじゃわからないよ。まず自分で一つで
もいいから作ってごらん」と言われ、実際に手を動かして貼って
みました。それでどうやら作り方は納得いったのですが、紙風船



の方は隙間だらけ。初めてやる人は百個貼ってみて、そのうち十
個できれば良いほうで、そういう人なら内職の仕事もできるそう
です。

紙風船とは立体のものです。紙を貼り合わせて作る過程は、
すべて平面においてです。まるで着物を折り畳むように平らなと
ころで紙を重ね、縁を返し、糊づけしていくだけなのです。出来
上ったものもベタタンコなものです。この思いもかけない作り方
で、丸い紙風船が出来上ってゆくのです。

《口と底つける》

口や底をつけるには、
空気を入れ、丸くした紙
風船を二つに帽子の形に
折り、穴のまわりにひだ
がでないように注意し
てのぼし、「坊様」と呼
ぶ針坊主を大きくしたも
のの上に載せて貼ってゆ
きます。

吹口のところは、昔は
金紙、銀紙を使っていま

したが、今では安全基準が喧しく、嘗めてもいよいよとアルミ箔が使われています。

こうして出来上った紙風船は、五個を重ねて三つ折にし、それを十寄せ、五十にして白い紙紐をわたし、一メにして問屋に出すわけです。この二五cmの紙風船は小売りで一個あたり六十円から七十円で売られているようですが、永江さんのところを出る時は、二十七円だということでした。

紙風船の今昔

永江さんが小僧をしていた大正十年頃は、ロール紙を用いて紙風船を作っていたということです。ロール紙というのは、昔、お菓子屋さんでお菓子を入れた紙袋の、あの白い紙です。しかし日本製のロール紙は品質が悪く、隙間があつて息がもれてしまうというので、スウェーデン製のロール紙を使っていました。白いロール紙は染料で染めていったわけですが、染紙は、糊で貼り合わせる際に色が落ちるので、糊を煮る時には塩を一つまみ入れて、それを防ぎました。

糊のことを永江さんは「しめ糊、しめ糊」と言います。しかし

そこは江戸ッ子、姫糊のことだと思われます。糊は昔も今も姫糊で、化学糊はあまりにも粘着力が強く、やり直しもきかないので、この仕事には使われません。

今のような半透明のグラシンペーパーになったのは、昭和のはじめ頃です。このグラシンペーパーは紙を漉く段階で染料を入れてしまうために、染紙と異なり、触って色が落ちるなどの心配がなくなり、糊仕事もきれいに仕上がるようになりました。

またグラシンペーパーは表裏がありません。ですから染紙の時には、のしたり糊をしく時に気を配りましたが、その心配がなくなり、仕事は楽になったようです。

グラシンペーパーになり、何といつても素晴らしいことは、紙風船の中に桜の花形が入るようになったことではないでしょうか。息を吹き入れると、透けた紙風船の中でクルクル花吹雪が起るようになったのです。花形に切った紙のほかには、小さな鈴も入れました。しかしこの場合は、紙風船を束ねるとぶつかつて紙がすれ、扱いには大いに困つたということです。

紙風船の配色は、地が白と黄で、あとの四色は、赤、緑、紫、牡丹というのが長い間の標準でした。しかし、五、六年前から紫と牡丹の色紙が製造中止となり、永江さんのところでは、そのかわりに黄緑色とレンガ色を用いて紙風船を作っています。

全国に三軒だけ残る紙風船屋さん

紙風船は現在では、東京の永江さんほか、新潟県出雲崎の磯野信吾さん、埼玉県行田の岡野文次郎さんと、三軒だけになっています。

磯野さんの話によると、出雲崎で紙風船を作るようになったのは大正八年のことで、長い冬の間、出漁の日数の少ない魚村の収入を僅かでも上げたいと、お父さんが紙風船を導入したそうです。磯野さんのお姉さんが上京し、「手貼り」を習得して帰り、皆に広めたようですが、昭和の初めに東京で「つる貼り」という能率的で簡便な方法が考案されると、その方法も取り入れ、今に至っています。

「つる貼り」というのは、槌受けのような曲がったつるの上で、舟型をした生地を提灯のように貼ってゆき、丸く貼り終わったら穴からそっとつるをぬくもので、この方法では紙風船が初めから丸くなってゆきます。

「手貼り」による紙風船と「つる貼り」による紙風船は見たところ同じようですが、その出来上りをよく見ると違ってきます。「手貼り」の場合は、赤、緑、レンガ、黄緑の濃い色が、薄い白や黄

の地色の上に、両端がのるように貼り合わされています。「つる貼り」の方は、全ての生地が、片端が上になったら、もう片端は下となるように貼られているわけです。ですから仕上りは、「手貼り」の方が美しいといえると思います。

しかし「手貼り」では十四cm位の小さな紙風船を作るのは難しく、「つる貼り」の方が容易に貼れます。昭和十年頃、紙風船の中に小さな紙風船（豆風船）を入れた親子風船というものが作られました。これは「つる貼り」だから出来たといえます。反対に、大きい紙風船は、重さがあるので「つる貼り」だとはがれてしまっただけで向きません。

さて、足袋の町行田で紙風船が作られるようになったのは、戦前、繊維関係が暇になり、足袋を入れる紙袋のグラシンペーパーがたくさん余り出し、これにおもちゃ屋さんが目をつけたのに始まります。神田には大きなおもちゃ問屋大西屋があり、その主人は行田出身でした。その為、行田周辺の人は、その人を頼っておもちゃ屋の世界に多く入ってきたのです。行田には、内職で足袋を作りなれて、手先の器用な人が多かったこともあり、紙風船の内職が起ってゆきました。

戦争になると疎開で、おもちゃ屋さんたちは行田に帰ってゆきました。そしてそのままそこで紙風船屋になる人も多かったわけ

です。戦後は、東京で紙風船がほとんど作られなくなり、行田で多く作られるようになっていきます。しかし行田にあった六・七軒の紙風船屋さんも、今では岡野さんのところ唯一軒になってしまいました。

永江さんは「やる人がだんだん少なくなってゆく仕事というのは、それだけ魅力がないんだよ。紙のおもちゃは安いものと思われているでしょ、一生懸命苦勞して作っても利益がないのね。だから減っていくのね」と言います。しかし、「つる貼り」の紙風船にも、ポリエチレンで作る風船にも手を出さず、今でもひたすら美しい「手貼り」の紙風船を作り続けている永江さんは、紙風船が好きでならないのだと思われまます。

それをわかっている奥さんは、御主人に反対されたそうですがプラモデルを中心とした小売りのおもちゃ屋を開いて、紙風船屋を続ける助けにしています。その奥さんが「今年（昭和五十三年のこと）はどうしてか特に紙風船が売れないのよ。もう紙風船はみんなに忘れられちゃたのかなって言ってたのよ」と話していました。

詩人黒田三郎さんに「紙風船」と題された詩があります。「落ちてきたら 今度ば もっと高く もっともっと高く 何度でも

打ちあげよう 美しい 願いごとのように」というものですが、半透明で、虹のように美しい紙風船が、これからいつまでも高く打ちあげられることを祈るのは、一人私だけではないでしょう。

日本保育学会第32回大会のお知らせ

期日 昭和54年 5月19日(土)・20日(日)

会場 明星大学

大会に関する連絡先は次のとおりです。

〒191 東京都日野市程久保337

明星大学人文学部心理教育学科

日本保育学会第32回大会準備委員会

(岡田正章)

電話 0425 (91) 5111 内線 315